

平成21年度 第1期展

文明讃歌

清川泰次が写したマシーン・エイジ

会期：4月1日～7月26日
入場者数：673人
担当者：高嶋雄一郎

戦後に洋画家として活躍する清川泰次(1919～2000)が写真趣味に没頭して青春を過ごした1930年代は、機械文明が人間に対して全肯定的に受容されていた時代とも言える。

軍国主義への傾倒や関東大震災などの災害からの復旧に合わせて次々と整備されていく交通網や建造物などのインフラストラクチャーは、不穏な空気に包まれつつあった国民生活が近代資本主義の産物によって好転しうのだというある種の熱狂を呼び起こし、人々に受容されていった。イタリアの未来派やドイツの新唯物主義がそうであったように、若き日の清川泰次もそうした未知の感覚を好意的に受け入れながら、カメラで積極的に文明の産物をとどめていった。

本展は、清川が大学生時代に写した昭和10年代の機械文明の象徴たる貴重な写真を展示し、当時の大衆生活と機械文明の在り方を検証した。



B2・B3ポスター

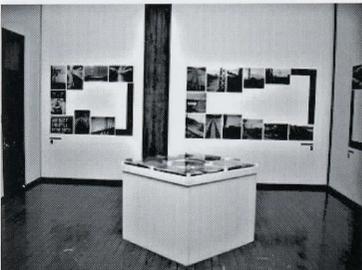


チラシ裏面

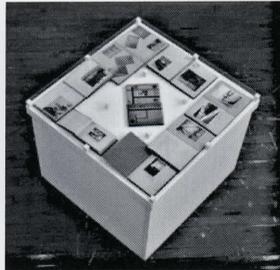
展示内容

- ・ 写真作品 88点
- ・ 絵画作品 1点《Gray&Black&White》1967年
- ・ アルバム 7冊
- ・ 書籍 1冊『機会と藝術の交流』板垣鷹穂著 岩波書店刊行

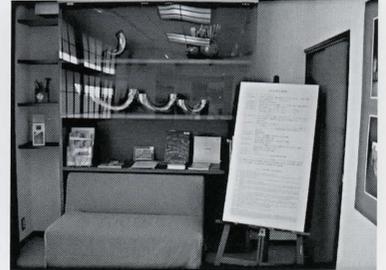
展示風景



大展示室



展示台



書棚全景

平成21年度 第2期展

清川泰次

絵画に宿る詩情

会期：8月1日～11月29日
 入場者数：1,178人
 担当者：村上由美

清川泰次(1919～2000)は、抽象表現を深めることで生まれる美を探求し、やがて形象に縛られない自由な創造美〈無対象純粹芸術〉という独自の画境へといたった画家である。しかし、具象的な表現を感じさせる初期の作品から、画面がきわめてシンプルな構成となっていく晩年の作品にまで、清川泰次が創り出す画面には、つねに詩情とも言い換えられる、おだやかな気配が宿っている。本展では、こられの画面から湧き出る鮮麗なイメージと、彼の残した言葉の数々を介して、清川泰次が作品に託した詩情と想いを探った。

なお、会期中、清川泰次のセンスが息づく建物を美術館にゆつくり堪能してもらうために、小展示室にて、清川泰次デザインのコップを使用して、お茶の無料サービスを始めた。

出品目録

No	作品名	制作年
1	メティタレーニアン風景 55-6	1955-1956年
2	港 55-6	1955-1956年
3	Quietude	1956年
4	海の見える街	1956年
5	白の中の鉛筆の風景	1956年
6	20号の白の風景-56	1956年
7	早春-56	1956年
8	マンダレー	1956年
9	レークサイド-56	1956年
10	白の中に太い鉛筆の線	1957-1958年
11	白の中の鉛筆の華	1960年
12	黄色の浮遊	1961-1963年
13	コーラルレッドの四角作品-62	1962年
14	イタリアーの空(群像表紙)	1962年
15	Painting No.5-62-3 赤とグレー	1963年
16	ザ・セルリアンブル 100M-11-63	1962-1963年
17	むらさきの絵-63	1960-1963年
18	Painting No181-B	1981年
19	Painting No2182-3	1982-1983年
20	Painting No3283-4	1983年

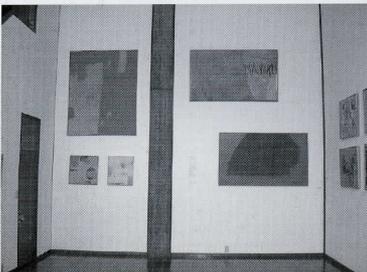


B2・B3ポスター



チラシ裏面

展示風景



平成21年度 第3期展

うららかに

清川泰次が写した昭和の女性たち

会期：12月5日～2010年3月22日

入場者数：740人

担当者：村上由美

形象に縛られない自由な創造美を探究した画家として知られる清川泰次(1919～2000)は、青年時代、慶應義塾大学の写真部に所属し、精力的に写真を撮っていた。その頃に撮影した写真には、「激動の昭和」という一つの時代を生きた女性たちの姿を捉えたものが多数存在する。

本展では、清川泰次が残した膨大なネガから、戦前の女性たちの姿を生き生きと撮った写真を紹介した。

昭和、それは女性の活躍の場が大きく変化し、家庭から社会へと広がった時代といえる。清川泰次の写真は、女性たちの生活様式の変化を追い、そこには一つの時代がが如実に映し出されている。カメラを構えたモダンな女性や、洗練されたファッションを身にまとい、ハイヒールを履いて都会を歩く女性たち……。

一方、息子の服を繕う母の姿や、子供をあやす母親たちの明るい笑顔など、身近な家族や知人が見せる普段の生活のなにげない日常の一コマ。そこには時代がどんなに変化しても変わらない女性の優しさが溢れている。

清川泰次がこれらの写真を撮影したのは、日本が戦争へと向かって進んでいった時代でもあった。こうした時代にあっても、女性たちは、日々、家族や周囲の人々にうらかな春のような温もりをもたらしていたといえるだろう。

小展示室では、来館者が写真とあわせて当時の世相を感じてもらうための参考資料として、同時代に刊行された婦人雑誌『主婦之友』（主婦の友社刊）を展示し、一部は本誌そのものを読めるようにした。

展示内容

- ・写真作品 54点
- ・絵画作品 3点
 - 《Painting No3096》1996年、
 - 《Painting No3196》1996年、
 - 《Painting No3296》1996年
- ・アルバム 3冊
- ・参考資料 12冊『主婦之友』（昭和13年～18年発行）
- ・参考図書 『昭和台所なつかし図鑑』（平凡社刊）



B2・A3ポスター



チラシ裏面

展示風景

